

poco a poco

パラグアイ便り 2024/01/01 Número11

2022年度 青年海外協力隊

氏名：吉田 花純

職種：小学校教員

【池田町立八幡小学校4年生のみなさんと交流会を行いました】

12月12日（日本時間）にオンラインで“日本×パラグアイ交流会”を行いました。ICTの活用により、遠く離れた場所とリアルタイムに繋がることができる驚きや喜び、互いの顔を見て話すことができる嬉しさを、児童らと共有することができました。

何もかもが日本とは違うパラグアイの学校や生活に、児童らは驚きを隠せない様子でした。画面越しに目を輝かせて興味津々に話を聞く児童らの姿を確認することができ、私自身にとっても大変有意義で幸せな時間となりました。パラグアイの子どもたちもとても可愛いですが、やはり担任をしていた教え子達の可愛さは格別です。また交流会後のフリートークや、事前事後アンケートなどで貰った言葉「花純先生、早く帰ってきて！」や「花純先生、大好き！」といった言葉が嬉しくてたまりませんでした。改めて、自分の教え子たちに恥じない自分でいよう、自分ができる精一杯のことをやり切って帰国しよう、と勇気を貰えました。

交流会の実施に伴い、八幡小学校の先生方には大変お世話になりました。直接お会いしたことのない先生方にもご協力いただきました。安心して帰ることのできる居場所を用意していただけていることが、自分が常に前向きに活動できている秘訣だと思っています。また交流会の中では、パラグアイでの教え子や同僚の先生方たちと一緒に撮影したビデオレターを届けました。様々な縁を感じており、自分にとって大切な人達が繋がっていくあの幸せな感覚は忘れがたいものです。先日には大親友の結婚式にオンラインで参加させてもらうなど、パラグアイで生活するようになってから、ますますICTの可能性について考えさせられる機会が増えました。

青年海外協力隊として今年1月からパラグアイで活動する池田町立八幡小学校の吉田花純教諭とのオンライン交流会が12日、同小で開催された。

パラグアイ派遣の教諭と交流

池田・八幡小 海外協力隊の活動説明



吉田さんの話に耳を傾ける児童たち。池田町立八幡小で。

吉田さんは「勉強で難しいことが出てきても『やってみよう』の気持ちで忘れないでほしい」と呼びかけ、今西結愛さん(10)は「学校におもちややお菓子を持って行っても良いのが印象に残った。先生が頑張っていることを思いながら学校生活を送りたい」と話した。交流会は世界に関心を持つってもらおうと吉田さんが提案した。2025年2月に同小に戻る予定。

(市川勤太郎)



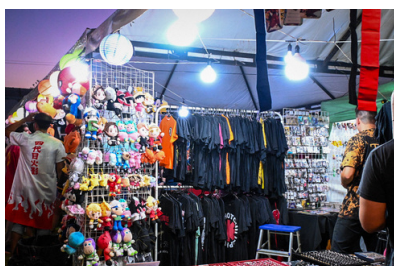
交流会の様子を中日新聞・西濃版(12/13)で紹介していただけました

フリートークの様子

【夏祭り“夏盆”に参加】

パラグアイにある日本人移住地で“夏盆”という名の夏祭りに参加してきました。自分は帰国したのではないかと勘違いしてしまうほどの本格的な日本式の祭りで、国籍を問わず、その場に集まったみんなで日本食を食べたり、盆踊りを楽しんだりすることができました。

距離を置くことで初めて発見できる自国の素晴らしさ、当たり前のように側にいてくれた家族や友人たちに対する感謝の気持ちを嫌というほど痛感する毎日です。帰国した後は、自分の国について改めてもっと知りたい、勉強したいと思っています。



【ひとこと】

こちらで出会ったある日本人の方に“君は人たらしの天才だね”と最高の褒め言葉をいただきました。その方を見てこられた景色や手にするもののすべてが私とは格段に違う、そんな恐れ多い人生の大先輩からの言葉でした。人様に自慢できるような経歴も、学歴も、趣味や特技も、何も持ち合わせていない自分です。世の中に「すごいなあ」と感じる人はたくさんいますが、自分がそのうちの一人になれるなんてことはこれっぽっちも思ったことはありません。ただただ自分の人生を謳歌しようというも野望を燃やしているだけです。そんな何も持っていない私のことを、私の人柄を“それは君の最大の武器だ”と教えてくださいました。自分が尊敬する人からの言葉には、計り知れない影響力を感じます。果たしてそれが本当のことであるかは別として、それが自分の武器であると実感できる日が来るまで、信じて磨いてみようと思います。どんな人がいつ、自分のどこに魅力を感じてくれるかは分からないものだなあと感じました。同時に、褒め上手なパラグアイの人たちを見習って、素敵だと思ったことについては積極的に言葉にして伝えられる自分でありたいと思いました。